

出土した瓦からみた南詔国中後期の国家構造

晏 梓郁 東洋史学分野・専門 博士前期課程2年

南詔国は8世紀から10世紀にわたって今日の中国西南部（主に雲南省）とミャンマー北部などの土地に存在した謎多き古代国家であった（図1）。この南詔国という国の歴史記録はわずかひと握りしかない。現代に伝わる文献史料以外に、文字のある実物史料は稀有である。その実物史料のなかで碑文の「徳化碑」は最も重要で、かつ最も多くの情報を伝えるものである。次は「倉貯碑」である。この碑文は2001年に発見され、南詔国の倉庫管理および早期の城鎮名などに言及している。残念ながら、この二つの石碑のほかにもまだに新たな碑文が出土しておらず、実物で南詔国の歴史を研究するには「有字瓦」に頼るしかない。

南詔国の遺跡で出土した有字瓦は漢字または漢字のようなマークを付けられた南詔国時代の瓦を指す。このような瓦が各南詔国の遺跡に広く分布しており、大量に存在する（図2）。情報量が少ないとはいえ、現に使える実物史料のなかで珍しく解読可能な史料である。2019年に私は雲南省考古チームから大理州付近の南詔国遺跡の発掘が再開されたことを知り、9月に現地で、実物の有字瓦およびその拓片を考古現場で確認した。調査地は南詔国の国都であった現在の雲南省大理白族自治州の大理市、巍山県および祥雲県三ヶ所であった。まずは大理市付近の大和城遺跡から出土した瓦のうち、2016年大和城仮発掘調査によって出土した瓦 [TS030W007④:28] の文字を解読すると「皇」もしくは「白王」2つの漢字に似ているが、筆者は「白王」の可能性が高いと考える。印された文字をよく見れば、何らかの模版でできた陽刻であり、「白」と「王」に類する文字は明らかに同じ模版にあるが、二文字が「皇」に見えるのはおそらく当時の職人が漢字に精通していなかったため、印した文字が稚拙であったからであろう。南詔国・大理国の君主を白王と称する習慣は確かにあり、また大和城と近いところに「白王冢」という地名も現存する。いずれにせよ、「皇」も「白王」も君主を指す言葉であり、この瓦の発注元は君主である可能性が高い（ただし、唐側の史書によると南詔国君主の称号は驃信である¹⁾）。また、瓦には明らかに「官」と「買」の2つの文字があり、公的なところからの注文で作られた瓦であろう。ちなみに、田氏は「官」は官瓦の略語で、「買」は職人の名前か記号だと考えている（田2011）。このような瓦は大和城付近での出土はかなり多く、当時この地域の瓦の製造は南詔国の政権から直接の指示を受けて行われたと考えられる。いままで南詔国時代の君主を「白王」と呼ぶのはあくまで白族内部の習慣であり、直接の文字史料がなかったため、この瓦の発見は白族の起源および南詔国王との繋がりにとって意味がある。

また同じ大和城から出土した瓦 [TS030W007④:11] から「官李買」3文字がはっきり判読できるが、「買」の下が欠けているため、これだけでは李姓の人が買った瓦か、それとも李買□という人が注文した瓦か判断し難い。しかし興味深いことに「南詔徳化碑」の碑陰にも李買□という人物の名前があった。現存の碑文では官職はすでに判読し難い状態になっているが、この人物は当時の南詔国の清平官であることは間違いないであろう²⁾。徳化碑の樹立は天宝戦争以後であり、その時にちょうど閣羅鳳が大和城を都にした。そのため、李買□はこの瓦の注文主である可能性が高いと考えられる。したがって、これらの瓦に記された文字はおそらくは発注先と注文主の身分を指す。また一部の瓦に「奴」、「田」および紀年（いまだに年号を示す文字は見つからず）があるため、某年某処または某氏に属す某職人が作った情報が記録されていたとも考えられる。したがって、「白王」という文字のある瓦なら南詔国の君主が注文したものかその君主に属した者が作った瓦の可能性が高い。

最後に、祥雲県の白崖遺跡で出土した瓦 [2017MJIG10①:86] から「大和酋」の3文字を判別できる。

1) 『新唐書』卷二百二十二中「子尋閣勸立、或謂夢湊、自稱驃信、夷語君也」。

2) 『金石萃編』卷一百六十収録の『徳化碑』碑陰の内容は『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』第35冊を参照。

大和または太和は当時の南詔国の都である大和城またはその地域を指す可能性が高く、大和酋は大和の君主を指すことは明白であろう³⁾。ただ、白崖城で発見されたこの称号は文献史料には存在せず、おそらくこれも当時実際に使われた君主の称号の一つであろう。その新たな称号は果たして南詔国の君主を指すか否かまだ検討する必要があるが、いままで史書で使われていない称号が存在すること自体は今後の研究にとっても有意義であろう。

まとめてみると、今回の調査で南詔国時代の国王および高官と繋がる瓦が確定された一方、瓦に記載された一部の情報は史書などの文献資料にないものの、当地の少数民族の口頭伝承には存在する。口頭伝承はこれからの研究に啓発的な意味があると考えている。



図1 南詔国およびその周辺勢力図

(出所：ウィキペディア <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E8%A9%94> 2020/3/16/ 15:30)

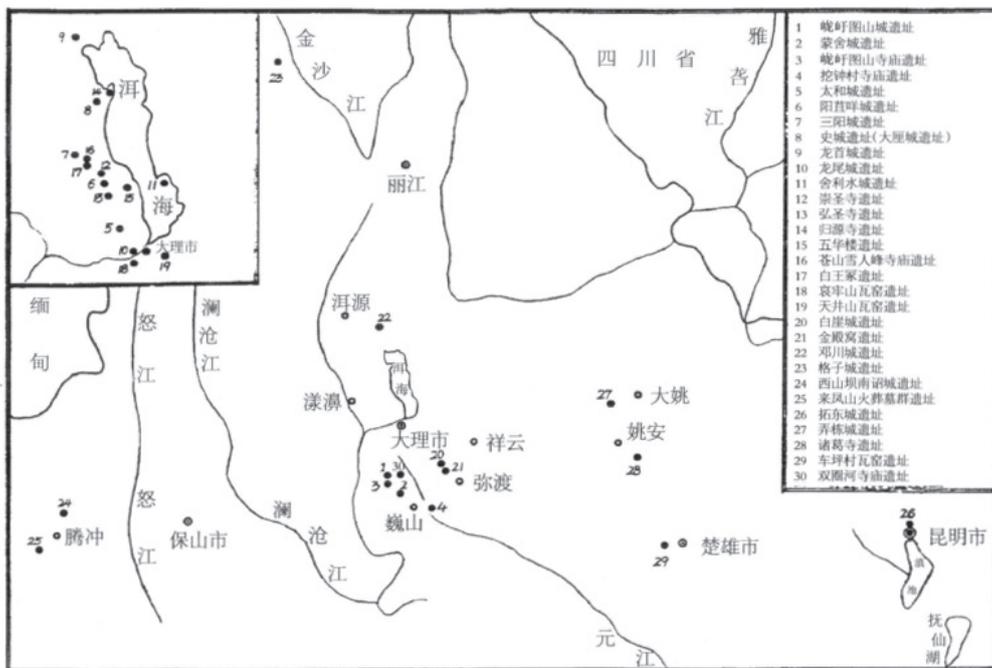


図2 「南詔大理国瓦文」分布図 (出所：田 2011、38頁)

参考文献

田懐清 (2011) 『南詔大理国瓦文』 雲南人民出版社

3) 『新唐書』卷二百二十二上「開元末、皮羅閣逐河蛮、取大和城、又襲大釐城守之、因城龍口、夷語山坡陀為和、故謂大和、以処閣羅鳳」。